Bulletin of the Educational Research and Development, Faculty of Education, Kagoshima University
2015, Vol.24, 347-352

報 告

賢い身体づくりを志向する「バルシューレ・ハイデルベルク」の実践報告

廣　瀬　勝　弘［鹿児島大学教育学部（保健体育）］

A practical report of "Ballschule Heidelberg" aiming the wise-body

HIROSE Katsuhiro

キーワード：球技学習、指導内容の系統性、バルシューレ・ハイデルベルク

１．はじめに

筆者は、所属先の海外研修制度（「鹿児島大学若手教員海外研修派遣事業」）を活用し、2013年５月から2014年１月迄の９ヶ月間、ドイツのハイデルベルク大学スポーツ科学研究所（Ruprecht-Karls-Universität Heidelberg, Institut für Sport und Sportwissenschaft）に客員研究員として滞在する機会を得た．本小論では、今回の研修滞在の主要な目的である「Ballschule Heidelberg」を対象とするフィールドワークの内容を簡易に報告することを目的としたい．

まず、ハイデルベルクの街について紹介することとする．ハイデルベルクは、ドイツ南西部に位置する人口15万人弱の街である．フランクフルト国際空港からは、特急電車を利用すると50分程で到着することが可能である．図１・図２の通り、旧市街地は、戦災被害から逃れ、ハイデルベルク城をはじめ古い街並みは現役活用され、街全体が文化遺産のようであり、大変美しい景観である．図１にある大きな川（ネッカー川）は、ワインの生産地として有名なライン川の支流であり、隣街のマンハイムで合流するため、ハイデルベルク近郊にもブドウ畑（図３）が数多く存在していた．ワインは、街の特産品の１つとなっていた．また、日本の文具店で数多く並ぶ、個性的なデザインの万年筆やボールペン等のメーカーである「LAMY」は、ハイデルベルクを本社とする企業である．

ハイデルベルクは、熊本市と姉妹都市関係にある．共に、街中から城を見上げながら生活をする点が似ているといえるであろう．年間を通じて、日本からの観光客は多く、南ドイツのツアー旅行では、訪問地として必ず含まれる街の１つであるようだ．また、観光ガイドブック等には記載はないが、街の郊外には、アメリカ軍の基地や原子力発電所を有しており、滞在中には、日本における原発事故についての質問や意見を数多く受けることとなった．

図１ ハイデルベルクの旧市街地①

図２ ハイデルベルクの旧市街地②

図３ ハイデルベルク近郊のブドウ畑

次に、筆者の研修先であったハイデルベルク大学について、紹介をしたい．ハイデルベルク大学（Ruprecht-Karls-Universität Heidelberg）は、1386年に創設されたドイツ国内で１番古い大学である．図１のハイデルベルク城下の旧市街地内と郊外の２カ所にキャンパスが分かれており、双方に学部や関連する研究所が集中している．筆者は、主に郊外のキャンパスに滞在していた．郊外といっても、２つのキャンパス間は、自転車を利用すると10分程度で移動可能な距離である．

滞在当時、ハイデルベルク大学には、約30000人の学生が学んでいた．筆者の研修先である「スポーツ科学研究所（Institut für Sport und Sportwissenschaft）」（日本式でいえば「スポーツ科学部」）には、約500人（学年定員100人×５年）の学生が在籍していた．ドイツの大学は５年制であるため、学生の年齢は、概ね20歳から25歳くらいであった．さらに、体育教員になるためには、その後、１年半の教育現場での研修（教育実習に該当）が必要となる．スポーツ科学研究所の学生たちの多くは、体育教員やスポーツ指導者を希望しているため、大学での学びは、そのための通過点という位置づけで考えているようであった．学生たちの学ぶ姿勢は、将来的な目標設定が明確であるためか、非常に高く感じた．滞在中のクリスマス休暇直前に、複数の学生に対して年末年始の予定を尋ねたところ、口を揃えて「レポート作成と勉強です」と即答されたことは、彼らの学ぶ意欲の高さを物語る出来事であるといえる．

また、学部の時間割には、「お昼休み（昼食時間）」の時間設定がみられなかった．昼食は、空き時間に各自で済ませているようであった．その多くは、自宅から食料を容器に詰めて持参し、学内のベンチや芝生の上で済ませていた．ドイツ学生たちの合理的に用件を済ませる姿勢には、感心させられるばかりであった．

２．『バルシューレ・ハイデルベルク』の理論

近年、ドイツでは、日本と同様、子どもの運動不足や体力・運動能力の低下の実態状況がみられる．加えて、肥満などの健康への悪影響、情緒不安定、社会性の欠如などの子どもが散見されており、その状況からの脱却を目ざすことが課題と捉えられている．

研修先であったハイデルベルク大学スポーツ科学研究所では、この課題の解決を目ざした取り組みが行われており、その１つが「バルシューレ・ハイデルベルク Ballschule Heidelberg」（Ballschule；＜ボール学校＞という意味）というプロジェクトである（以下BS-HDとする）．

BS-HDは、1998年にProf. Dr. Kraus Roth（図４）により、60人の子どもたちへの指導から開始された．その後、地域のスポーツクラブ、小学校、幼稚園を対象として活動が順次拡大された．現在では、２歳から11歳迄の子どもたちを対象として、ドイツ国内においては、10000人以上の子どもたちが参加する大きなプロジェクトとなっている．

プロジェクトには、Prof. Dr. Kraus Rothを含め10名の専任スタッフが役割を分担しながら活動を展開している．近年は、ドイツ国内だけではなく、オーストリア・メキシコ・チリ・ブラジル・ウクライナ・日本など、国際的にも広く紹介がされるようになっている．研修滞在中にも、ウクライナのオリンピック委員会等から視察があり、BS-HDプロジェクトの指導内容及び方法に注目をされている様子であった．BS-HDは、学校で実施される体育授業ではなく、「スポーツクラブの１つである」という位置づけであると捉えられる．

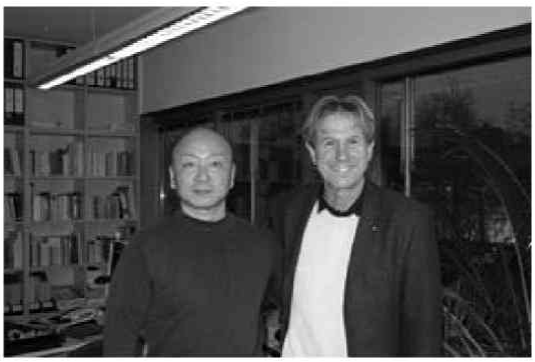

図４ 筆者とProf.Dr.Kraus .Roth（研修の受入教員）

図５ 指導者講習会（講義）

図６ 指導者講習会（実技）

BS-HD の指導コンセプトは、個別のスポーツ種目の学習に入る前に、全てのボールゲームに共通する最大公約数的な基本要素を、プレイしながら習得することができるようにプログラムが考案されているところに特徴があるといえる．

そのコンセプトは、以下の３つの領域（「Ballschule ABC」と規定）で提示されている．第１のＡ領域は、「プレイ力の育成（Taktik-bausteine）」であり、プレイを繰り返しながら、乏しい運動経験を分厚くし、運動技術の基礎基本の習得が目ざされる．第２のＢ領域は、「身のこなしの育成（Koordinations-bausteine）」であり、全ての技術に通底する一般的な運動協調的要素の獲得が目ざされる．第３のＣ領域は、「技術の育成（Technik-bausteine）」であり、全てのボールゲームの運動技術に共通するスキル要素の獲得、日本式で別な言い方をするならば「コツ」と「カン」を同期させるための内容で構成され、それらを「モジュールスキル」という名称で呼んでいる．モジュールスキルには、「軌道の認識」「味方の位置・動きの認識」「敵の位置・動きの認識」「ボールアプローチの決定」「着球点の決定」「キャッチ・キープのコントロール」「パス・シュートのコントロール」などが含まれる．BS-HD の活動が急速に拡大した理由は、「楽しみながら子どもの運動経験を分厚くする」ことを目的としたゲーム教材を、研究結果に照合させ、的確に順序づけ配置したことであると考えられる．

また、BS-HD は、誰もが指導担当が可能なのではなく、そのコンセプトの内容と実践とを繋ぐための理解を学習した指導者のみが、子どもたちへの指導担当ができるようにしているところが大きな特徴であるといえる．つまり、「指導資格」を明確に位置づけ、指導内容と方法を共有化し、その遂行と責任の所在を明確にしたことが、急速に拡大した第２の理由であると考えることができる．

図５及び図６は、その指導ライセンスを取得・更新するための「指導者講習会」の様子である（筆者が滞在中には、２度実施された）．

「指導者講習会」は、「１日講習」になっており、90 分間の講義の後、60 分間の実技講習を３種類（上述の３つの領域別）受講し、最後に 30 分のまとめの講義が用意されていた（ここでも昼食時間は設定されず、15 分間の休憩を挟みながら、講習は休むことなく順次継続された）．研修会の合間に、受講者の方に個別にヒアリングをすると、ベルリン・ハンブルク・ケルン・ミュンヘンなど、研修にはドイツ全土から参加されているようであった．この日の講習会は、早朝から開始される大変窮屈な

日程であったが、積極的な質疑応答が適宜行われ、意欲的な受講態度には大変驚かされた．講習会の最後には、指導資格の保持・継続を意味する修了書が参加者全員に授与され、講習会は終了となった．

３．バルシューレ・ハイデルベルクの実際

今回の筆者の研修滞在において、大変参考になったことは、BS-HDがどのような組織運営の中で、実際に展開されているのかを確認できたことであった．本項では、滞在中にハイデルベルク市内で展開されていた活動について具体的に報告を進めたい．

BS-HDは、「Baby Ballschule（２～３歳）」「Mini Ballschule（４～５歳）」「Ballschule（６～11歳）」と、対象とする子どもの年齢にしたがい、大きく３つのステージに分け、前述の基本コンセプトを維持しながら、ステージ間を円滑に繋ぐべく、一貫指導を目標として展開されていた．

図７は、「Baby Ballschule（以下B-BSとする）」の様子である．B-BSは、週に１度（30分間）、ハイデルベルク大学の体育館で実施されていた．フロアには、子どもの興味関心を引くような、様々な遊具が設置され、加えて、風船や多種多様な形のボールやボールを操作するためのラケットに類した道具などが無造作に置かれ、子どもたちが自由に活動を行っていた．

指導者が１名おり、はじめとおわりに、当日の活動テーマ等を伝えて、指導が展開されていた．基本的には親子（30％程度は祖父母が同行）で共に活動を行っていたが、あくまでも親は、子どもの動きのサポートをする姿勢が徹底されていた．設置された遊具やボール・道具を通じて、自分の身体との関係を知るということに、主眼が置かれているようであった．毎週30分間という時間の中で様々な動きを獲得する子どもたちの観察を通じ、「幼少期の運動経験の必要性」を再確認するばかりであった．

図７　Baby Ballschuleの様子

図８　Mini Ballschuleの様子

図９　Ballschuleの様子

図８は、「Mini Ballschule（以下M-BSとする）」の様子である．図８でボールをドリブルしているのは、５歳の子どもたちである．M-BSは、基本的には毎週火曜日と金曜日の週２回、45分間を１コマとしてハイデルベルク大学の体育館で実施されていた．M-BSでは、「自分」と「ボール」

の関係構築と共に、ボールという対象物を、意図的に操作するために、様々なゲーム教材が用意されていた．指導者は、毎回、内容を適宜修正しながら、子どもたちが飽きないための工夫を施していた．研修滞在途中からは、筆者も指導スタッフの一人として参加することができ、大変貴重な経験を持つことができた．

図９は、「Ballschule（以下 BS とする）」の様子である．図９で活動しているのは、８歳の子どもたちである．M-BS は１クラス最大 10 名、BS は１クラス最大 15 名として、指導が実施されていた．Prof.Dr.Kraus Roth に、対象とする指導人数について確認をすると、「１人の指導者が 15 名以上のこどもたちの安全を含めた効果的な指導を展開することは難しいと考えている」との回答であった．日本の学校体育では、ボールゲームの指導が難しいと言われている．それは、１人の教員が、数多くの学習者を一度に指導対象としなければならないことにも起因しているとも考えられよう．

図９は、地域の小学校の体育館における BS 活動である．放課後に BS を希望する子どもたちを対象とした「出前授業」のような形態で実施されていた．図９の左端の指導者（男性；Soren Stainger 氏．現在、経済学を専門的に学び、将来は高校教員志望）は、ハイデルベルク大学の学生である．当然ながら、氏は、BS の指導者講習会に参加をして、指導者ライセンスを保持していた．氏にヒアリングをしたところ、氏は、自身が得意なハンドボールを通じて、BS-HD 専任スタッフから個別に声をかけられ、指導者になったようである．BS 指導は、週当たり４コマ担当しており、若干ながら謝金があるようであった．図８における指導者（左から２人目の男性）も、ハイデルベルク大学の学生である．学生たちも指導者として、BS-HD プロジェクトの重要な一員として活動を行っていた．このような取り組みは、大学を基点として活動を展開する仕組みとして、個人的には、大変興味深く感じた部分であった．

BS は 11 歳迄の子どもたちが対象となるが、12 歳以降、継続してスポーツ・運動を実施したいという要望があった場合には、子どもが希望する種目の実施が可能な地域のスポーツクラブを紹介し、運動経験や運動生活が途切れないような仕組みができていたことには大変驚かされた．BS-HD と連係するスポーツクラブには、ハイデルベルク近郊のプロチーム（サッカーブンデスリーガ１に所属する「1899 Hoffenheim」やハンドボールブンデスリーガ１に所属する「Rhein-Neckar Löwen」）なども含まれており、子どもから要望があり、運動能力の高い子どもたちは、当該チームのジュニアチームの活動に加わることが可能であった．プロチームにとっては、BS-HD は、多様な運動経験を持ち、能力の高い子どもたちを獲得する「タレント育成部門」のような位置づけと捉えていると、考えることができよう．逆に、BS-HD から捉えるならば、スポーツ・運動を継続するための「橋渡し」をする役割を、プロチームとの連係の中に含ませているように考えることができる．

しかしながら、実際に BS-HD 活動を精察する限りでは、基本的には「多様な運動経験の確保」に主眼が置かれていた．BS-HD は、あくまでも、プロスポーツ選手を目ざした子どもを育成するのではなく、最優先事項として、自分の身体を意図的に動かすことのできる「賢い身体づくり」を志向していることが、現地におけるフィールドワークを通じて確認できた内容であった．

４．おわりに

テレビのスポーツ中継において、アナウンサーや解説者などから「ヨーロッパにはスポーツ文化が根づいている」という主旨内容のコメントが度々聞かれる．ドイツでの９ヶ月間の滞在を通じて、このことに関連して強く感じたことの１つは、「ドイツでは、スポーツ・運動をするための『環境』が整備・保証されている」ということであった．

図 10 は、ネッカー川（図１・図２参照）の河川敷の広場に作られているビーチバレーの専用コートである．ハイデルベルクだけではなく、他の地域でも、公園や地域のスポーツクラブ内など、多くの所でビーチバレーの専用コートを確認することができた．ハイデルベルク大学スポーツ科学研究所の体育施設にも、４面のコート確保が可能なビーチバレー用の専用砂場があった．図 10 の

砂場の隣には、子どもの遊具が設置されており、夏期など気候のよい時期には、たくさんの人が河川敷に集まり、運動・スポーツに興じる姿があった．

図10　河川敷にあるビーチバレーコート

図11　週末のサイクリング風景

図12　多種多様なボール

図11は、週末にサイクリングを楽しむ家族の様子である．ドイツでは、週末になると、家族や仲間とサイクリングを楽しむ光景が数多く見られる．子どもたちも安心して自転車に乗ることができるようである．その最大の理由は、自転車専用道路が、明確に位置づけられていることである．図10のネッカー川の河川敷には、15km以上続く自転車専用道路があり、そこでは、小学校低学年期の子どもたちも安心して、サイクリングを楽しむことが可能であった．また、日曜日は、全ての店舗が休業であり、加えて、コンビニエンスストアは皆無であるため、家族や仲間とサイクリングを行い、出向いた先で持参した昼食等を食べ、時間を過ごすというのが典型的なライフスタイルのようであった．日曜日に、店舗が営業していないことも、ドイツの人々を、スポーツ・運動に志向させることの一助になっているようである．

図12は、BS-HDの活動において用いられている道具（ボール）である．その中には、「ボール状」のものも散見される．M-BSやBSに参加する子どもたちは、同学年ではあるが、発育発達面において若干ながら差が生じているため、学習が円滑に進まない場合が発生することがある．例えば、ボールを投げるという同じ課題であっても、その課題解決のために、学習者にとって最適な大きさのボールを使用することができれば、学習のつまずきを回避することができると考えられる．特に、運動・スポーツの学習場面においては、道具によって、その成否・効果は大きく左右されると言えよう．とりわけ、初等教育時の子どもたちにとって、運動学習時の「成功体験の保証」を確保することは、教師にとって重要な授業づくりの視点であると考えられる．その成功体験を保証することの観点の１つが、図12に代表されるような「道具の工夫」であることは容易に理解することができる．新しい動きを習得することを学習の最優先事項として捉え、その学習が成功裡に展開するよう、「環境の整備（学習者に道具を合わせる）」を行うことは、運動・スポーツに子どもを接近させるため、あるいは、馴染ませるためには不可欠なことであると考えられる．

以上、簡易ではあるが、研修滞在の報告としたい．最後に、この度、研修の機会を与えていただいた本学関係者の皆様及びサポート頂いた国内外の皆様に深く感謝する次第である．